

発表題目：

## 複数種の配置と生の再編

## ー北陸・大野盆地におけるツキノワグマの市街地出没とその対応策から

所属： 東京大学大学院総合文化研究科

氏名： 北川 真紀

1200 字程度で発表内容を記載してください。

本発表では、現代日本の山間地域において近年「恒常的な危機」となりつつあるツキノワグマの市街地出没への対策を描写するとともに、その防除の前線に立つ猟師が、地理的条件、動物の生態、法律、科学的知識、市政、そして自身の身体という重なり合う条件のもとで、いかに「自然」の力を受け止め、生を再編成しているかを明らかにする。

調査対象地区である福井県大野市は 360 度 1000m 級の山に囲まれる盆地であり、その面積の 8 割以上を森林が占める。世界的には乱獲等の影響から年々数を減らしているツキノワグマは、絶滅危惧種として保護の対象となってきたが、日本においては例外的に分布域および個体数が増加傾向にある（九州等一部の地域を除く）。大野盆地においても古くから奥山での狩猟対象となってきたツキノワグマは、2004 年秋に初めて市街地周辺への出没が確認されるようになり、その後も周期的に人里に現れている。2019 年には、福井県内で 400 件以上の目撃報告があり、人身被害も発生した。出没の背景には、ツキノワグマの主要な餌である森林内のブナ、ミズナラ等が周期的に凶作となること、高齢化と人口減少による人里の活力の不足等が指摘されてきた。加えて、猟師による狩猟圧の低下、保護の対象でもあるツキノワグマを射殺するという対応に伴う軋轢も存在している。2020 年夏には、森林内の木の実の作柄状況だけでは説明のつかない出没も連続的に確認されており、個体数や食性等の生態に対してもこれまで基準となってきた科学的な調査の結果が該当しない現状が浮き彫りになってきている。

恒常化しつつある出没に対して、防除を担う猟師たちは、高齢化する自身の身体に合わせ、対策を「デザイン」し直してきた。2000 年代には家屋や工場など建物内に侵入するという危機的状況になってから銃を使って「力でねじ伏せる」（捕殺）対応が多かったものの、2019 年にはツキノワグマの行動を先回りして読むことで戦略的な捕獲網を配置し、わずかな痕跡でも「徹底的につきあう」（捕獲・放獣）という試みがなされた。狩猟と有害捕獲という似て非なる行為の行き来によって培われてきた猟師の自然理解は、現在、重要な知見として、ローカルな政治対応、科学的知識、そして保護管理計画に見直しを迫るものになっている。

本発表は、福井県大野市での 2018 年 9 月から 2020 年 7 月にかけての長期フィールド調査に基づく。植物、モノ、野生動物、人間等の複数種の配置の変容によって全体として立ち現れてくる自然の「力」を受け止めながら、試行錯誤のなかで確立されてきた新たな対策のデザインを描きつつ、ツキノワグマの市街地出没という現在進行形の危機をいかに人類学的に思考するのか、フィールドの具体的なイメージをもって議論の俎上にのせることを試みる。